

海外舞踊学文献紹介 バレエ・リュス 100周年をめぐって

鈴木 晶

ディアギレフのバレエ・リュスが正式に結成されたのは1911年のことだが、歴史的には1909年のパリ・シャトレ座公演「第1回セゾン・リュス（ロシア・シーズン）」が何といても重要なので、2009年は世界各地で「バレエ・リュス100周年」が祝われた。主要バレエ団はほとんどバレエ・リュス・プログラムを組んだが、この機に出版された本も多い。



1. Sjeng Scheijen, *Sergej Diaghilev: Een leven voor de kunst*, Uitgeverij Bert Bakker, Amsterdam, 2009.

バレエ・リュス100周年最大の収穫は本書である。著者スケイエンはまだ若いオランダ人。ロシア美術の専門家で、これまでいくつもの大きなロシア美術展の企画に加わっており、モスクワのオランダ大使館の文化参事官をつとめたこともある。

原著は2009年に出版されたが、オランダ語のため、すぐに英訳 (*Diaghilev: A Life*) がまずイギリスで (Profile Books, 2009), 次いでアメリカで (Oxford University Press, 2010) 出版された。欧米の研究者、あるいはバレエ・ファンの中で「話題沸騰」だったといっても過言ではなく、著名な研究者たちがこぞって絶賛している。

ディアギレフの伝記として最も早いものは、アーノルド・ハスケルがディアギレフの親友だったワーリテル・ヌーヴェリの協力を得て1935年 (ディアギレフ逝去の6年後) に出版した伝記 (Arnold Haskel in collaboration with Walter Nouvel, *Diaghileff: His Artistic and Private Life*) で、これが長いこと定番であったが、79年にバックルによる伝記 (Richard Buckle, *Diaghilev*, 邦訳は絶版) が出て、今度はこれが定番になった。だがバックルの本は伝記というよりむしろバレエ・リュスの活動記録である (その点ではいまだに最重要文献のひとつである)。ちなみにバレエ・リュスに関する最重要文献はLynn Garafola, *Diaghilev's Ballets Russes* (1989) である。なお、ガラフォラ氏は2011年春に早稲田大学演劇博物館の招聘で再来日する予定。

スケイエンによる本書は文字通り初めての本格的なディアギレフ伝である。最大のメリットは、これまで欧米ではその存在すら知られていなかったようなさまざまなロシア語文献にもとづいて書かれている点である。欧米のバレエ研究者は、ジョン・ボウルトやティム・ショール (もっとも前者の専門はロシア文化・美術、後者はロシア文学) を例外として、ロシア語ができない。バレエ・リュス研究の第一人者であるガラフォラですら、ロシア語文献に関しては全面的にエリザベート・スーリッツに頼っている。

筆者は本書を読んで、ディアギレフのことが初めてわかった、というか、今まで知らなかったことばかりが書かれており、ただただ自分の不勉強を恥じるばかりであった。なお、邦訳は来秋刊行予定。

2. M.Auclair et P.Vidal (sous la direction de), *Les Ballets Russes*, Gourcuff Gradenigo, Paris, 2009. 300p.

これは2009年冬にパリ・オペラ座で催されたバレエ・リュス展の図録だが、図版よりも論文が中心で、巻末には年譜と、バレエ・リュスのダンサーと写真に関する貴重な小事典が付されている。収録されている論文の多くはボリス・コフノ・コレクションをはじめ、オペラ座図書館所蔵のバレエ・リュス関係資料の解説 (入手の経緯など) だが、バレエ・リュスとバレエ・スエドワの美術に関するもの (Frank Claustrat), プノワに関するもの (Catherine Boncenne et Dimitri Vicheney), 写真家に関するもの (Cristina Barbero) などもあり、Mathias Auclair et Aurélien Poidevinの論文はバレエ・リュスとオペラ座の関係を整理してまとめてあり、便利。

パリ・オペラ座の展示スペースはご存じのようにあまり広くないから、バレエ・リュス展の展示

物もけっして多くなかったが、バレエ・リュスはパリを中心に活動したバレエ団であるので、オペラ座にしかない資料も多い（余談ながら、オペラ座内の美術館・図書館はオペラ座ではなく国立図書館に所属している）。ちなみにバレエ・リュスとオペラ座の縁についてはすでに、ルイ・ヴィトンの寄付で出版された次の写真集がある。M.Kahane et N.Wild, *Les Ballets Russes à L'Opéra*, Hazan/Bibliothèque Nationale de France, 1992.

3. Florence Poudru, *Dans le sillage des Ballets Russes, 1929-1959*, Centre National de la Danse, Paris, 2009. 126p.

これも展覧会の図録。オペラ座でバレエ・リュス展が開催されていた頃、国立舞踊センターではこの、バレエ・リュスの影響を辿る展覧会が開かれた。きわめて小規模ではあったが、貴重な視点からの興味深いものだった。展示および図録の構成は次の通り。「バレエ・リュスの遺産」「ロシアの商標」「継承」「再生」「神話」。



4. Jane Pritchard (ed.), *Diaghilev and the Golden Age of the Ballets Russes 1909-1929*, Victoria and Albert Museum, 2010. 大判, 240p.

世界中で開かれたバレエ・リュス展の中でもっと期待されていたヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の展覧会は、結局2010年9月から開催された。そのオーガナイザーであり、この図録の編者であるプリチャードは研究者としても国際的に名高く、その緻密で手堅い仕事ぶりには定評があるが、ここでもその才気と学識をフルに発揮している。メインの論文3本（「バレエの変容」「作品

の創造」「成長し続ける巨人——バレエ・リュスの衝撃、影響、遺産」）をプリチャードが書いているが、後述のウッドコックが衣装について寄稿、前述のボウルト（「バクスト、ゴンチャロフ、ピカソ」）、スケイエン（「人間ディアギレフ」）らも寄稿している。その他、「旅」「芸術世界」「ディアギレフの少年たち」「ポール・ボワレ」「劇場」「毎日の稽古」「スポンサーと財源」「緞帳」「記念プログラム」「シャネル」「ポーモントの豆本」などの挿画入りコラムが面白い。

5. J.E.Bowlit, Z.Tregulova, N.R.Giordano (ed.), *A Feast of Wonders: Sergei Diaghilev and the Ballets Russes*, Skira, 2009. 大判, 320p.

これはモナコの新国立美術館とモスクワのトレチャコフ美術館で開催された展覧会の図録。開催地にちなんで、バレエ・リュスとモナコの関係についての論文（Giordano, Garafola）があり、またブノワ、バクスト、レーリヒ、ラリオノフ、ゴンチャロフらロシアの画家たちに関する論文（Fedosova, Misler, Iliukhina）やいわゆる銀の時代（Bowlit）やロシア・アヴァンギャルド（Marcadé）に関する論文が含まれているのが特徴といえる。スケイエン、シュヴァロフらも寄稿している。

6. A.Purvis, P.Rand, A.Winestein (ed.), *The Ballets Russes and the Art of Design*, The Monacelli Press, NY, 2009. 大判, 208p.

歴史的シャトレ座公演からちょうど100年後、2009年5月19日に、ボストン大学で国際シンポジウムが開かれた。ガラフォラが司会をし、パネリストの顔ぶれは驚くほど豪華だったが、場所がボストンということもあって聴衆があまりに少なく、気の毒であった。これはその催しとの関連で出版された図録。ボウルト、ガラフォラその他、かつてロンドンの演劇博物館のキュレーターだったサラ・ウッドコックが寄稿しており、コレクターとして有名なロバノフ＝ロストフスキーへのインタビューもある。またハートフォードにあるワズワース美術館のバレエ・リュス・コレクション（ここでも小さな展覧会が催された）に関する解説も。

ここで紹介したほかにも、ハンブルクで開かれた「色彩の舞踊」展（その図録は大変貴重なものだが、小林氏の原稿を参照されたい）、ストックホルムの舞踊美術館で開催されたバレエ・リュス衣装展の大きなカタログなどがある。

ここで紹介した図録には、当然、誰もが知っている有名な図版が重複して収録されているが、同時にそれぞれの本には、他では見られない図版が数多く収録されていて、どれも捨てがたい。